大学編㊺ 最新事情

実践力を養い、地域社会に貢献できる人材を育てる

共愛学園前橋国際大学

（群馬県前橋市）

共愛学園前橋国際大学は、学内にとどまらず県内の企業や自治体、商店街や山村の集落などさまざまな場を学生の学びの場としてきた。学生は地域の人々と関わりながら考え、話す力を磨いており、インターンシップも短期・長期で実施している。同学の学生は、将来的には群馬県内で地域の産業などを支える人材として期待されているという。同大の取り組みを伺った。

学生もデザインに参加したという
共愛学園前橋国際大学キャンパス

大人との関わり方を知り地域で活躍できる人材に

赤城山を背景にたたずむ共愛学園前橋国際大学は、国際社会学部国際社会学科の単科大学である。1学年約300人という小規模を強みとし、きめ細やかな学生支援を行ってきた。

「本学ではこれまで一貫して『群馬県内で育った大切なお子さんをお預かりして4年間で成長させ、この地域にお返しする』という姿勢で教育を行ってきました。そのため県内の入学者が約9割で、卒業生もほとんどが県内の企業や自治体で活躍しています。この積み重ねのかいあって、地域とのつながりは非常に密接です。在学中から学生が地域の人々や企業、自治体と関わって活動する機会を数多く設けており、さまざまな年代の人との接し方などを学び身に付けるチャンスがあります」。

こう話すのは、入試広報・就職部長でありキャリアセンター長でもある鈴木京子さんだ。

その言葉通り、学生の学びの場は学内にとどまらない。正課外でも、さまざまな場を活用して学びを深める〝学生プロジェクト〟が複数運営されている。例えば、情報・経営コースで代々運営されているのは、地元企業とコラボレーションして商品の開発や販売を行い地域活性化に貢献する仮想企業「繭美蚕（まゆみさん）」。地域課題解決プロジェクト科目から発生した、みなかみ町藤原地区にある平出集落で地域課題の解決を図る「共愛ＣＯＣＯ」は、「地域の孫になる」を合言葉に、伝統的な食事の作り方を学んだり雪かきを手伝ったり、地域の高齢者と交流しながら地域の見守りを継続して行っている。オープンキャンパスは「学生広報スタッフ」が全ての企画運営を行っており、学長や学部長にも学生からメールで依頼が行く。他にも学生主体のプロジェクトは幾つもある。これらの機会を生かし、発言力や実践力を鍛えていくのだという。

もちろん学生たちが入学直後から主体的に活動できるわけではない。大学の改組以来、特に力を入れてきたのはアクティブラーニングだ。主体的・能動的な学習の機会として7割以上の授業で取り入れている。

入試広報・就職部の部長であり
キャリアセンター長でもある鈴木京子氏

「1年次から、学生はさまざまな科目でプレゼンテーションやディスカッションを行います。入学当初は人前で話すのが得意でなかった学生も、繰り返しているうちにだんだんとそれが当たり前のことになっていくようです。上級生になると堂々とした様子で地域の方々とやりとりする姿が見られます」(鈴木センター長)。

地域の人から「人懐っこい」「屈託なくコミュニケーションが取れる」と評価されており、かわいがられている様子が伝わってくるそうだ。一方で、ビジネスの場で求められる話し方や立ち居振る舞いとなると「また別に学びの機会が必要」と鈴木センター長は言う。同学ではインターンシップにも力を入れており、夏休みを利用した約10日間の「インターンシップ」と約4カ月実習を行う「長期インターンシップ」が科目として設定されている。それらの実習中は、組織の一員としての言動が求められるからだ。

「『インターンシップ』では事前指導の中で秘書検定を取り入れています。大人の社会で求められる話し方や立ち居振る舞いを理解してもらうためで、受講した学生は3級か2級を受験します。指導は外部講師にお願いしていますが、敬語の使い方や電話の応対、メールの書き方など、一つ一つ『なぜそうする必要があるのか』から説明してくださるので、学生は理解しやすいようです」(鈴木センター長)。

社会人として求められるマナーを自主的に学び、身に付ける学生も

同学では、履修科目外で、自主的に秘書検定に取り組む学生も多い。

国際コース3年生の田村彩さんは、長期インターンシップでの反省点から、秘書検定を学ぶことにしたという。

「地域活性化に関心があり、2年生後期に前橋市役所の地域振興課で実習を行いました。そこで社会人の方々とコミュニケーションを取る際に、自分の未熟さを実感しました。事前学習であいさつやお辞儀、名刺交換、敬語などは一通り学んだのですが、知識として覚えただけで身に付いていなかったのです。ビジネスの現場は学生生活とは違うことばかり。卒業までに大人として恥ずかしくない立ち居振る舞いを身に付けたいと思いました」。

現在は就職活動中。志望する企業の担当者と電話でやりとりする機会も多いが、秘書検定で学んだことを生かし、丁寧にコミュニケーションが取れている。

「電話は声だけのコミュニケーションなので、言いたいことを、即座に正しい敬語に置き換えて言えるようになっておいてよかったです。電話に出られず折り返すときも、焦らず落ち着いて話すことができます。他にも、秘書検定で学んだ上司やお客さまとの関係の築き方は、就職してからもすぐに役立ちそう。いろいろな立場の人とコミュニケーションが取れるように、もっと勉強したいです」(田村さん)。

心理・人間文化コースの高橋沙季さんは、まだ1年生ながら、就職活動を見据えて秘書検定の勉強を始めた。

「今のうちに勉強しておいてよかったです。特に敬語や接遇用語などは、普段の生活にも仕事に就いてからも役立つ内容。参考書を目で追うだけでなく、敬語表現の一覧を繰り返し口に出して練習しました。以前は目上の人に対する言葉遣いをあまり意識していませんでしたが、アルバイト先で、お客さまと話すときに正しい敬語を意識するようになりました。アルバイトも実践の機会になることを実感しています」(高橋さん)。

(左から)心理・人間文化コース1年生の高橋沙季さん，国際コース3年生の田村彩さん

最新事情 55……共愛学園前橋国際大学

県内の企業や自治体で行う「インターンシップ」。事前指導に秘書検定3級を取り入れ基本的なマナーを身に付ける。実習後は報告会も行う

それでもやはり敬語は難しい。「上司とお客さまなど、さまざまな立場の人が複数いる場面での尊敬語や謙譲語の使い分けは、理解するのに苦労しました」と高橋さん。迷いなく使えるようになりたいと目標を語る。

「ビジネスの場面はまだ想像でしかないのですが、社内文書・社外文書の作成や電話応対などは社会人になったら必須の技能だと思います。大学生活では、先生にメールを送るとき、必ず書くべきことの確認や文面での敬語など、勉強したことが生きています。今学んだことを忘れず、卒業までにもっとスキルを高めていきたいです」（高橋さん）。

二人とも、学生のうちに上位級にチャレンジしたいと意欲を示してくれた。

やりたい、学びたいことを自ら見出す力を伸ばしたい

同学では教員とキャリアセンターが共同で担当する「キャリアプランニングⅠ～Ⅳ」を開講している。Ⅰ（1年生後期）・Ⅱ（2年生前期）は必修で、大学での学びや自分自身について、そして広い意味での〝キャリア〟について考える。Ⅲ（2年生後期）は自己理解をさらに深め、ファーストキャリア・セカンドキャリアなどについても学ぶ。Ⅳ（3年生通年）では、今後の人生を考えることになる。進路を見据えた業界研究や、既に内定を得ている4年生や企業の人事担当者の講話もここで行われる。

「大学も、彼らにとってステップアップの足掛かりの一つ。今後の人生をどう歩んでいくのかを自分で考えてもらいたい」と鈴木センター長。それと並行して、授業で実践力を磨き、さまざまなプロジェクトを「試してみる場」として生かしてもらうのが、同学の教育なのである。その成果はオープンキャンパスでも見ることができる。やる気と自信に満ちた先輩の姿を見て進学を決める高校生は多いのだ。

「やろうと思えば、本学にいる間にさまざまなことが経験できます。自分でできることを見つけ、友人同士で声をかけ合い、力を付けてほしい。アドバイスが必要ならいつでも相談できるよう、教職員もできるだけオープンに接しています」（鈴木センター長）。

1年生の高橋さんは、後期に選択した科目「街中商店街」で商店街の活性化のために地域の人との関わる機会があったそうだ。

「参加してみると面白くて、学外の活動にも興味が出てきました。これからの大学生活の中で、もっといろいろな立場の人たちと関わって学んでいきたいと思っています」（高橋さん）。

学生たちが自ら、「やってみたい」「学びたい」と思うことこそが、成長の鍵だろう。そのために、地域を巻き込んで学びの場を用意する。地域の未来を支える大学ならではの、学びの場づくりのヒントがここにある。（2024年2月9日取材）

短期とは別に「長期インターンシップ」も選択できる。まとまった期間実習できるためじっくりと自らの課題を発見することができる